

# 『欠けたピース』

## 第一章 人の人生

1

福田健介は大手企業に勤める会社員である。今は課長として手腕を振るっている。傍からは大手会社のエリート社員として人も羨むように見えるだろう。しかし、その男にも悩みがあった。

妻が難病を患い長く入院をしていた。いつまで続くとわからない多額の入院費用、それでも経済的には、何とかやりくりをしていた。しかし、多感な時期に近づく小学六年になる男の子を抱えた福田は、子育て、看病、そして仕事にと次第に疲れを感じ始めていた。

健介は、休みになると子供を伴って妻の病室を尋ねるのが、ここ数年の日課となってい

た。普段は、何かと気難しい表情の多い健介であったが、その時だけは明るく振る舞っていた。子供や妻と一緒に居られる僅かな時間だけが、仕事での嫌な事も忘れられるひとときであった。

その日は休日であった。健介は息子と一緒に妻の病室を尋ねていた。ただ、その日に限っては心持ち健介の顔色は青く、笑顔の数も少なかった。それでも、いつもと変わらない優しい言葉を妻に掛けていた。翌日、健介は息子を学校に送りだすと、部屋に籠もって一人で考え事をしていた。

昼頃であった。健介が自ら鴨居に紐をかけて死んでいったのは。

健介の妻も、その数日後に病院で息を引き取った。夫の自殺に気落ちしたのか、それとも天命であったのか。あるいは、その二つが絡んでの事であるのか、それは誰にもわからない。

年間三万人、これは近年日本での自殺者の数である。福田健介の自殺も、その中の一つに過ぎなかった。ただ、この件は少しだけ世間の注目を浴びた。それは、福田健介の自殺が汚職事件に纏わるものとして、新聞紙上やマスコミが取り上げたからであった。しかし、

それらも時が過ぎれば風化し、人の噂にも登らなくなる。まして、健介の残された子供が、その後、どうなったかなどは、世の人々にとっては関心のないものであった。

2

警備会社に勤務する郷田重治と木嶋豊は、近くの銀行で現金を回収すると、それを現金輸送車に積み込んだ。

運転席には若い木嶋、助手席に郷田が座ると銀行を後にした。車は国道に抜ける、住宅街の静かな道を走っていた。二人にとっては走り慣れた道路であった。

バックミラー越しに木嶋は、猛烈な勢いで迫る車を確認した。僅かな時間だった。その車は狭い道で強引な追い越しをしてきた。一瞬、木嶋の顔には緊張が走った。

助手席の郷田の鋭い目が、追い抜いた車のナンバーを読んでいた。しかし、追い抜いた車は何事もなかったように、車間距離を伸ばしていった。

「無茶な奴だ！」

吐き出すように郷田がいうと運転をしていた木嶋も、

「最近は、あの手の運転をする人間は、少なくなっただと思っただけですが、まだ、あんな馬鹿が居るんですね」といった。

それでも自分達の運転する現金輸送車が、狙われてないとわかれば、木嶋の表情からは緊張が消えた。

遠ざかる車を、目で追っていた木嶋の口から「あっ！」という声が漏れた。

助手席に座る郷田の目にも、その異変が飛び込んできた。

現金輸送車を追い越した車が、歩いていた少女らしき姿と重なった後に、少女が倒れて行った。同時にその車のブレーキランプが点灯をした。それは、その車の運転手も何が起きたのか、いや、人に車をぶつけたとわかったとの意味であった。しかし、その車は、その場から走り去った。

「轢き逃げだ！ 木嶋、あそこで車をとめろ」

木嶋達の車は、すぐに少女の倒れていた場所についた。倒れていたのは中学生と思われるセーラー服を着た少女であった。

跳ねられたというよりも、すれ違いざまに当てられた感じに郷田には見えていた。ただ、

それは離れた場所から受けた感覚であつた。

二人は駆け寄つた。女の子の膝や足からは血が流れている。ただ、やはり外見的には、それほど大きな損傷を受けたようには見えない。それでも少女は、ぐったりとして動かない。

生きている。それは木嶋にもすぐにわかつた。木嶋は女の子に何度も声を掛けたが、女の子から返事はない。

「郷田さん、これはまずいですよ！」

少女の様子から木嶋は、少女が頭を打つたかも知れないと思つた。これでは動かすにも動かせない。困つたと思つた木嶋が、郷田の方を振り向いた。そのとき郷田は、すでに携帯電話を片手に、救急車を呼んでいた。

薄汚れたアパートの一室であつた。有馬祐一は病院から戻ると、部屋の電気も灯さずに暗い部屋の中央に座っていたが、その肩はがっくりと落ちている。

何故、俺達だけがこんな目に遭うのかと、貯金通帳を握りしめながら心の中で祐一は呟いた。それは有馬祐一が、もうすぐ二十歳を迎えようとしていた時の事であった。

祐一は、二年前まで児童擁護施設で妹の祥子と暮らしていた。

祐一は、擁護施設から高校に通った。妹が居る。少なくとも高校だけは出たいと考えた。高校を卒業すると施設を出て、施設からそれほど離れてない自動車部品製造工場に勤めた。祐一は必死で働いた。働き出しても遊ぶとの考えなどはなかった。人付き合いの悪い奴と周囲から面面向かって言われる事もあった。しかし、そんな事は気にもとめなかった。

安い部屋を借り食費も節約した。祐一はコツコツと金を貯めた。少しでも早く妹の祥子を施設から引き取り一緒に暮らす。それが祐一の、そのときの全てであった。

働きだしてから一年半が過ぎた。僅かながら蓄えもできた。祐一は祥子を施設から引き取ると二人で暮らし始めた。その頃には、祥子も中学生になっていた。慎まし暮らしではあったが、それでも、やっと兄弟二人で誰にも気兼ねせずに、肩を寄せ合つての生活に満足もあり、笑いも耐えなかった。

そんな穏やかな暮らしを、ぶち壊すできごとが起きた。祥子が学校からの帰り交通事故

に遭ったのは、二週間ほど前であった。事故を起こした犯人は、その場から逃げた。

祥子は倒れたときに頭を打っていた。病院に運び込まれたときには意識を失っていた。次の日、祥子の意識は戻った。

祐一は涙を流して喜んだ。意識の戻った祥子も、顔をくちやくちやにし、「御免なさい」と祐一を見て泣き出した。そんな祥子に、祐一は心配ないと優しく微笑んだ。

3

有馬祐一は山形信司から呼び出され、アパート近くの公園にいた。公園とはいっても住宅街のなかに作られた小さなもので、おそらく広さは、そこに住宅を建てれば、やっと三軒くらいが作れるほどの広さであろうか。

公園と呼ぶよりは、広場と表現をした方が適切なのかも知れない。従って利用者も近くの小さな学童が砂遊び程度のものをしたり、子供を抱いたお母さんなどが、昼間に立ち話をする程度の使われ方になる。当然ながら夜ともなれば、利用する者は滅多にはいない。子供用に作られたブランコに、ちょこんと尻をかけて、祐一と信司は話しをしていた。

「祥子ちゃん、大変な目にあつたな。轢き逃げと聞いた」

信司は妹の事を心配して来てくれたのかと思つて、祐一も信司の話しを聞いていた。

「どうするんだ、祥子ちゃんの入院費。お前、用意できるのか？」

祐一の顔は暗かった。親も居ない施設育ちの祐一に金を工面する手だてはなかった。それでなくても病院の話しでは、足を骨折している為に、しばらく退院は無理だといわれた。「なあ、祐一、俺達は学歴もなければ金もない。そんな人間は幾らでも不幸が押し寄せてくる」

「わかっている。そんな事は」

「結局は、金なんだよ。俺達みたいな底辺の人間は、何処かで金を掴まなかつたら、まとも生きていけない」

慎ましくとも生きていければ良い。しかし、世の中は、それほど甘くはない。

国の医療制度を使えば、事故相手からの保証はなくとも、何とかなると考える人もいるだろう。しかし、それは暮らしに余裕がある人に言える事であつた。たしかに、多くの部分は補填されるが、一人一人が一ヶ月、入院をすれば、何だかんだといつて見えない金が出



ていく。まして祥子の入院中の食費や自己負担分などの、月々の病院への支払いは十万では済まない。それは、やっと兄弟での生活を始めた祐一には重い負担であった。多少の貯金はあっても、いつまで、その貯金でまかなえるかとなれば不安は消えない。

「祥子ちゃんの為にも、賭けてみる気はないか？」

「賭ける？」

賭けるといった信司の言葉の意味が飲み込めずに、祐一は戸惑いと一抹の不安を覚えながら信司を見た。信司の顔には汗が浮いている。夜になっても気温は、いっこうに下がらうとしない。その為に梅雨時期特有のべたべたとした不快な夜であった。

「そうだ、俺も、こんな生活はもう嫌だ。金になる話がある」

「……悪い事か？」

信司の前振りからして良い話しでないのは、何となくわかった。肩を落とした祐一は、信司から目を反らした。

「ああ、だがな、何も人を傷つけるような物騒な話しではない。それも確実に億の金が入る」

「億の金？」

驚いたように祐一は、信司をみた。

「盗み、……だ。——いいか祐一、よく考えろ。犯罪なんかは何度も手を染めるから、いずれは警察の御用になる。一回、一回こっきりで大金を手にして、捕まらなければ、それを元手に商売でも始めれば勝ち組になれる。その一回に賭けるかどうかだ」

盗みという言葉に、祐一の表情は曇っていた。ただ、心が動かないわけではなかった。祐一にしても金は必要であった。

「そんな簡単に、億の金が入るのか？」

「それは心配ない」

「相手は？」

「やるか？」

信司の言葉に祐一は、はっとして言葉を失った。

「俺は祐一を信用している。だから、ここまで話した。しかし、ここから先はお前の決心が必要だ」

幾ら友人だとはいえ、祐一の態度がはっきりしないのに、すべては話せない。それは当然であった。しかし、祐一にしても犯罪と聞いては即座に返事などできるものではなかった。祐一は気難しい表情を浮かべていた。

「どのような金でも手をつければ、俺達は犯罪者だ。良く考える事だ。別にすぐに返事をしろとは言わない」

無理に誘ってはこない。一端のつっぱりを気取ってはいるが、信司は本当の悪ではない。それは祐一が誰よりも知っていた。祐一は表情を曇らしたまま、信司を見ずに小さく頷いた。

「狙う金は個人の物ではない。消えても保険が落ちるものだ。……それに、お前だから話すが、まず警察に捕まるという事もない。いわば俺達にとっては都合の良い、そういったぐいの金になる」

言っている意味が良く判らない。そのような都合の良い金が、この世にあるのかと思っただ。しかし、祐一にしても、それ以上は聞けなかった。聞けば、この場で返事をしないとならないような気がした。

祐一と公園で話していた山形信司は、同じ児童施設の出であった。信司は祐一より半年位遅れて施設にやってきた。

施設にきた当初の信司は、いつも人から距離をおき、しかめっ面をしていた。見るからに人見知りの激しい性格のように見えた。

ただ、よく考えてみれば、施設にやってくるには親を失ったり、親からの虐待を受けたりと、それなりの理由があつてとなる。まして大きく環境が変わる。そのような境遇であれば、誰もが最初は信司と同じように人と交わろうとはしないのかも知れないが、それでも信司の場合には、それが人よりも激しくうつった。

祐一は半年前に、施設に来た時の自分と重ねて見ていた。

妹の祥子は背中に大きな火傷の跡がある。祥子は、今は、その事を気にとめてないのかも知れないが成長すれば、その傷について必ず悩みます。いや、すでに心の中では悩んでいるのかも知れない。それだけに、祐一には小さな祥子を守らないとの、強い気持ちを入

居るときから持っていた。その気持ちは、祐一から不安や苛立ちを奪い去っていた。

祥子を守る為であれば、施設の大人や入居している同じ子供達にさえ、媚びをうる事も祐一は厭わなかった。祐一は仲間から受け入れられるように、常に明るく振る舞っていた。祐一は信司の姿を見て、おそらく俺も祥子が居なかったら、同じような態度を取ったろうと思った。

そんな祐一である。祐一は誰とも問題は起こしたくなかった。それが気難しい人間であれば有るほどに。その為には、できるだけ新たな入居者とも仲良くしようと接していた。しかし、信司の心は病んでいた。平気で年上の入居者などに、喧嘩をふっかける日々が続いた。それは、まるで自分をいたぶるかのようでもあった。次第に施設の空気は悪くなった。

祥子も信司に対する怯えが見えていた。祥子だけではない、小さな子供達が信司を避ける。入居は遅くても、中学生になる信司や祐一は施設では年長組である。その人間が暴力を振るえば、小さな子供が怯えるのは当たり前であった。

祐一もついに我慢できなくなった。祐一は、人気の無い場所に信司を呼びだして、信司

を殴った。勿論信司も殴り返してきた。中学生くらいの時の喧嘩は、そのときの気持ちの強い方が勝つ。まして、祐一も痩せてはいたが背丈はある。

信司の上に馬乗りになった祐一は、大粒の涙を見せながら殴った。その口からは「小さな子供が、お前を怯えている。その何が楽しいんだ」と、繰り返して信司に向けられた。

いつしか信司の抵抗が止んだ。祐一も殴るのを辞めた。祐一は、信司から降りると、信司の横に体を横たえた。

祐一が一言、呟いた。

「もう、いいよな」と、その言葉は信司の心にも伝わった。信司の目からも涙が溢れていた。それからの信司は、施設で暴力を振る事もなくなり、その償いでもするかのように、年少者の面倒をこまめにみるようになっていった。

信司は祥子を自分の妹のように可愛がった。いつのまにか施設の中で、三人はいつも一緒に居るようになっていた。

二年が過ぎるのは、すぐであった。施設から中学校に通っていた信司は、卒業すると施設を去り、小さな町工場に勤めだした。

祐一には祥子がいた。先の事を思うと、どうしても高校は出たかった。祐一は施設から高校に通った。

就職した信司は、機械と向き合う製造の仕事は生に会わないとして、一年くらいで工場を辞めていた。その後は、正業に就かず、街をぶらぶらとしては、喧嘩をしているなどの噂が流れていた。

しかし、その後も信司は、時々、おみやげなどを手に施設を訪れては、祐一や祥子と逢っていた。その姿は施設にいたときと変わらなかつた。色々な欠点はあつても、やはり、祐一や祥子にすれば、信司は数少ない友であつた。

信司と別れた祐一は暗い夜道を歩いていた。暗いといつても、周囲の家から漏れる明かりもあれば、街路灯もある。歩くには、不便はない。

夜だというのに赤いオープンカーが、道路横に止まっていた。その横で真っ赤なシャツに白のフレアスカートという目立つ姿の女が、携帯電話を片手に何か話しをしている。

車の近くに居るのは、その女だけであつた。祐一は、通り過ぎようとした。そのとき「もういい、馬鹿野郎！」と、怒鳴る女の声が聞こえた。その声からは若い女のようにあ

った。

祐一は、チラリとそつちを見た。髪は短めのボーイッシュ風、そこに彫りの深い派手な顔立ちしている。その容姿からしても、如何にも気の強そうな感じを受けた。

祐一は関わりたくないと思い、目を背けようとしたが、祐一の目と女の目が合ってしまった。女は、一瞬、怒ったような顔を見せて、そつぽを向こうとした。しかし、すぐに女の顔に笑みのようなものが浮かぶと、その口元が開かれた。

「ねえ、君、タイヤ交換できる？」

祐一は、えっと思い、その場に立ち止まった。

「パンクなの」と女がいった。

祐一は赤い車を見た。車の前輪が潰れている。

それで、何となく女が携帯電話に向かい怒鳴った理由がわかったような気がした。おそらく女は知り合いの誰かに応援を求めたが、上手く行かなかったのかも知れない。

「そりゃ、できるけどスペアタイヤと工具は有るのか？」

「あると思う」



「思う？ トランク、開けて」

高飛車に声を掛けてきた女である。祐一は少々ぶつきらばうに答えた。

「サンキュー」といって、女はトランクを開けた。

トランクルームを除いてみた。カバーで覆われている。そのカバーを外してみた。スペヤータイヤが覗いた。

女の態度や容姿から、全く車のメンテナンスなどに興味がないのが見て取れる。スペヤータイヤを手で押してみた。空気は入っているようである。工具もタイヤの下に見えていた。

祐一は黙ったまま、タイヤを取り出すと交換を始めた。

「私、奥田曜子、有り難うね」

始めて女が礼を口にした。祐一は、タイヤのボルトを緩めながら黙って頷いた。その後、女は、タイヤ交換を行う祐一の後ろ姿に向かって、語りかけてきた。しかし、その時の祐一は、話すのも話しかけられるのも億劫であった。

「俺は、こんなところで轢かれたくない。車が来るのを見張ってくれ」

夜である。車が接近すればヘッドライトの光でも判る。女を引き離す為の口実であった。女は素直に頷くと、少し離れたところから車の往来をちゃんと見張っていた。

平坦道路でのタイヤ交換である。交換はすぐに終わった。

「終わったよ」

外したタイヤを、トランクルームに治めながら祐一がいった。そばに来ていた女が「有り難う」と、いうと財布から一万札を二枚、無造作に取り出し、祐一の手握らせようとした。

「いらねえよ」

女の手をはねつけながら、祐一がいった。

「そう、お金に困っているような顔をしているけどね」

女は笑いながら、冗談めかしていった。冗談にしても、巫山戯た言葉であった。しかし、祐一は怒るよりも一瞬、ドキッとさせられた自分を感じる方が早かった。

「お金は邪魔には、ならないものよ」

そういうと女は強引に、祐一の手二枚の一万円札を握らした。祐一は魔法にかかった

ように、逆らう事ができなかつた。

女は、そのまま車に乗り込んだ。ボタンとドアが閉まる音がすると、エンジンが回りだした。慌てて祐一は、車のそばから離れた。赤い車は、そのままスルスルと走り出した。走り去る赤い車を睨んだ祐一の手のなかでは、二枚の紙幣がちぎれるばかりに強く握りしめていた。

数日が過ぎた。祐一は貯金を下ろして病院の支払いをすると、その足でアパートに戻つた。祥子の事故は月の途中であつた為に、最初の支払いは、それほど多くの金は必要ないと思つていた。しかし、その考えは甘かつた。病院の明細書には、色々な検査項目や手術名が書かれていた。正規の支払いでは軽く百万を超える。保険が適されても支払額は三十数万になる。

三十数万は祐一にとっては大金であつた。それでも、この一回で済めばどうかできる。しかし、祥子は足を骨折している。しばらくはリハビリが必要になる。

先生に、どのくらいお金がかかるのか聞いた。事務局でわかるから、そこで聞いてと言

つてから、ぼぞつと先生は十五、六万かなと独り言のように言ってくれた。

祥子は背中に大きなハンディを持っている。足まで不自由には絶対にはできない。もっと設備の整った大きな病院に移り、何としても祥子の足を元通りにしたい。そんな強い思いはあっても、すでに貯金も底をつく。無理なのは祐一自身が一番良く知っていた。

情けなかった。これまで祥子を養うくらいはできると思っていた。そう、こんな事故さえ起きなければ、やっては行けた。轢き逃げ、考えだけで腸の煮えくりかえる思いがした。ふと死んだ父親にすがりつきたい気持ちに沸いた。しかし、それを祐一はうち払った。今は、自分達を残して死んでいった父親を恨んでいる。

——億の金、金の苦勞をしないで済む生活。その金があれば、祥子の背中の傷も治せる。暗い部屋に大の字に寝そべり、薄汚れた天井を見上げていると、知らずに頬に涙が伝わっていた。悔しかった。轢き逃げさえなければ……と。そのとき赤い車に乗った女の姿が、目に浮かんだ。たった十分くらいのタイヤ交換に、躊躇なく二万の金を使える女。年も、自分とそれほど違ってなかった。それだけに。——羨ましかった。

公園の子供用ブランコに座った信司と祐一が、夜空を見上げていた。長く続いた東京の梅雨も終わり、季節は初夏を迎えていた。

「東京でも星がみえる」

街の灯りを受けた東京の夜空は、ブルーをおびた奇怪な空色をしている。星などは見えそうにないが、目を凝らせばちゃんと星も光っている。

「そうだな、しかし、あの下の赤い光、あれは違うぞ」

「あれは航空灯の光、それくらいはわかる」

「そうか」

「……………」

「決めたか？」

夜空を見るのをやめた信司がいった。同じように前を向いた祐一が、黙ってそれに頷いた。

「狙うのは、草葉市にある警備会社の金庫」

警備会社であれば億の金があっても不思議ではなかった。

「簡単に入れるのか？」

「大丈夫だ、住宅地にある小さな警備会社の事務所だ。警備員も夜は一人だけだ」

「警備員がいるのか？」

「心配ない、仲間だ」

「……警報とか、防犯カメラは？」

「それは警備員が切る」

「切るって、それでは警備員に疑いがかかる」

「スイッチを切るのではない。配線を切る、それも建家外部で」

信司は、田中という男から事前に建家外部の配線を切断しておくから、警備員への疑いは防げると聞いていた。

「仲間は警備員と、その田中という男だけか？」

「いや違う。とびきり心強い仲間がいる。だから心配ない」

「何人居る？」

「判らない。何人いるのか、知っても仕方ない。いや、知らない方が良い」

「そうだな、で、金は？」

「袋四つ持ってこいと言われた」

信司の話しによれば、その警備会社には月末には、近くの銀行や会社などから集めた現金が十億くらい集まるという。集められた金は布袋に入れられたまま保管されている。一つの布袋には約五千万、袋四つは二億を持ってこいとの意味らしかった。

「なあ祐一、金は多いほど良いけど、しかし、欲張って捕まったら元も子もない。俺は一億円くらいで良いと思っっている。それなら奴らに渡す四袋と俺達の取り分四袋、袋八つだ。二人なら一回で外に運び出せる」

「四袋も持てるのか？」

「持てるさ、一億円で、どのくらいの重さか知っっているか？」

「知らない」

「たった十キロだ。俺達は二人とも百七十センチ以上のたっぱが有る。一人二億として袋四つで二十キロ、それなら一度に持てる」

二人で一度に八袋を持ち出せば、四億円が手に入る。おそらく全ての金を運び出すのも、やろうと思えばできる。しかし、時間を賭ければ、それだけ危険は増す。そこまで危険を冒す気持ちは、信司には初めからなかった。祐一を誘い入れた責任が信司にはある。何が有っても様子を抱えている祐一だけは、絶対に捕まらせる訳には行かないのであった。

「それがかまわない」

押し入った先に長居はできない。長居をすれば、それだけ人の目に付く。祐一も、それだけあれば十分だと思った。

「これで人生を変えられるのだな」

「そうだ」

「……しかし、金庫を開けたら、やはり警備員は疑われる」

「話しはついている。刺す。刺すのは太ももの命に関わらないところだ」

「刺すのか？」

「ああ、じゃないと警備員は必ず疑われる」

「警備員も知っているんだな」



信司が自信ありげに頷いてみせた。

「他の仲間というのは、心配ないのか？」

「おそらく警察だ」

祐一は薄暗い中で、じっと信司の顔を見た。前にも信司の口から警察関係者が絡んでいくような話が出ていた。しかし、どうして警察が、との複雑な気持ちにもなる。

「狙う警備会社は警察OBが作った会社、今は警察の天下り先になっている」

警察関係者が退職後に警備会社に勤める例は、祐一も知っていた。また、交通整理や大きな催しなどでは、警察と警備会社は連携をとるような話しも聞いている。元々警察との関係を持つ警備会社を警察OBが設立する。それも有りうる。

信司の話しからすると警察関係者が、緊密な関係にある警備会社を襲わせる。どうも、その様な構図の話しになる。

「おかしな話しに見えるが、俺が貰った情報は警察からのもの。すでに金庫の番号も知っている」

「何か警察内で、仲間割れでもあったのか？」

「判らん、警察も人の子だ。金が欲しい人間も要る。そんな事はどうでもよい。警察関係者が絡んでいれば、捜査に手を抜く事も、情報を得るのも容易いだ。実際に田中から捜査はいい加減に終わるから、捕まる心配は無いと言われている。だからお前を誘った」

「……上手すぎないか、この話し？」

「そうかも知れないけど、田中を俺に紹介したのは、俺を捕まえた現職警官だ」

「捕まったって？」

「喧嘩だ、別に逮捕された訳じゃない。そのときに田中を紹介された」

「そうか、それはいいとして、こっちは二人で、何億でも自由に取れるけど、相手は何人いるかわからないのに二億だろう。何故二億で良いというのだ」

「そうかな、相手の二億も大きい金だ。そうだろう。もし傷を負った警備員の取り分を、その半分の一億としても残りは一億。仮に後に五人いれば、此奴らは何の苦労もなく二千万の金が入る。これが後ろに潜んでいるのが、二人だったら五千万円になる。それも本当に危険を冒すのは、俺達と警備員だけだ」

「……………」

「嫌か？」

ここまで来たら祐一としても、後には引けなかった。

それから、間もなくであった。信司から七月二十六日金曜日の夜に決行すると伝えられたのは。

6

その日がやってきた。真夜中の一時を回った頃、二人は祐一の運転する車で草葉警備会社の近くにいた。

長く車を道路にとめておくのは危険であった。信司を車から降ろすと、祐一は車を走らせた。信司が先に降りたのは、防犯カメラのケーブルが切断されているか確かめる為であった。相手の話が嘘や冗談であればケーブルは切られてない。その場合は、計画を中止し引き返さないとならない。

周囲を流してきた祐一が、信司を車に拾った。

「ケーブルは切られていたのか？」

「切れている」

「そうか、……じゃ、防犯カメラには写らないな」

「ああ」

祐一は意を決すると、そのまま車を警備会社の駐車場に乗り付けた。

警備会社の通用口の鍵は開いている筈であった。手袋をした手で信司が引くと通用口は静かに開いた。二人はめざし帽で顔を隠して警備会社に忍んでいった。

静かであった。人の心配がない。祐一は何かいやな感じがした。

「信司、警備員が居ないぞ」

祐一が小声で信司にいった。信司も太い眉の下にある鋭い目で、しきりに当たりを見回していた。通用口の鍵は開いていた。間違いなく警備員との連絡はついている。それなのに何故警備員の姿はないのだと信司も不審に思っていた。

「便所か？」

信司の声で二人は用心をしながら、便所や仮眠室も調べてみたが、そこにも警備員の姿はなかった。それ以上の事を考えている余裕は、二人にはなかった。

「取りあえず金を運び出す」

二人は静かに金庫のある部屋に戻った。信司が金庫のダイヤルを回し出した。その間、祐一は鋭い目で周囲を見回していた。

金庫はすぐに開いた。布袋が見えている。一人が四袋持ち出せば一度で済む。それだけであった。

「ナイフを机の上に残していく」

仕方ないと思った。警備員が戻ってくれば、そのナイフで自分を刺せばよい。

信司も焦っていたのだろう。ケースから取り出し、机に置こうとしたナイフが床に落ちた。

コツンと音がした。その音に二人とも顔を顰めた。実際には小さな音であった。しかし、二人には鐘の音ほどの響きにも感じられた。祐一が慌てて床に落ちたナイフを拾い上げた。柄には僅かな凹みがついていた。

「柄が凹んだ」

馬鹿みたいな会話であった。普通するときなら、ナイフの柄についた傷の話しをしてもお

かしくはない。しかし、ナイフは、これから置いていくだけのものである。こんな状況で話題にする話とも思えない。それだけに二人の不安な心理が現れていたのかも知れない。

「そうだな」

信司も、無意味とも思える会話に苦笑いで応じた。祐一も苦笑いをしてナイフをテーブルに置いた。

細めに開けた通用口のドアから外を確認した。辺りに人影はない。二人は、布袋を車に投げ入れ警備会社を後にした。

祐一の運転する車は、そのまま街を出ると河川敷に向かった。そこには用意をしておいた車がある。二人は袋を積み替えると、使った車からナンバープレートを外して河川敷の藪に車を乗り込ました。

河川敷に捨てられた車を装うものであった。それで全ては終わりであった。

「なあ祐一、俺達はしばらく逢わない方がよい。俺は奴らに金を渡したら沖縄当たりでんびり暮らす」

「わかった」

「様子ちゃん、これで何とかなるよな」

祐一が、大丈夫だと強く頷いた。

それを最後に、二人は車に乗り込んだ。

明け方前にアパートの住人に気付かれないように、祐一は部屋に戻った。眠れなかった。金を得た喜びからではなかった。不安や後悔、犯罪者になったとの複雑な思いが神経を高ぶらせていた。

仕方ないと自分に言い訳をした。言い訳をする以外、心を抑える手だてはなかった。しかし、事態は、その朝には一変した。テレビのニュースで警備会社に強盗が押し入ったと報じていた。そこまでは、祐一も予測をしていた。しかし、祐一を襲った衝撃は、警備員が殺害されていたと報じられたときであった。そのニュースに祐一の頭は真っ白になる思いがした。しばらく祐一はニュースを食い入るように見ていた。

テレビが報じた内容によれば、警備員は鋭利な刃物のようなもので刺され殺害され、数

億円の現金が奪われたとなっていた。

昨夜警備員は出てこなかった。すでに、あのとき警備員は何処かで殺されていたのかも知れないと思った。目を見開きテレビ画面に見入っていたが、やがて、テレビから目を離すと祐一の目は空中を彷徨っていた。

(嵌められた)

嵌められたという言葉は浮かぶが、何がどのように嵌められたのかとなると、すぐには浮かばなかった。そのとき祐一の携帯電話が鳴った。信司からだった。

「信司、どうなっている!」

祐一の声は荒々しかった。

「わからん! 俺にもさっぱり」

信司も興奮していた。

「警察が絡んでいるのは、間違いないのか?」

「……そう、聞いていた。しかし、自信がなくなった」

信司にしても、警察関係者が殺人までするとは思えなかった。そうなると警察関係者だ



と聞かされた事も怪しくなる。

「警察の捜査、あると思わないとならない」

「済まない、その覚悟が必要かも知れない。なあ、祐一、一緒に逃げないか？」

「駄目だ、俺には祥子が居る。ここから離れられない」

「そうだよな、そうなんだよな。ほんとに済まない」

萎縮した信司の声がした。信司は、金を必要としている自分を知って、良かれと誘ってきた。警備会社に押し入る事を決めたのは自分であった。今更、信司を責めてもどうにもならない。

「俺は、祥子の為にもすぐに捕まる訳にはいかない。俺の事はどの程度、相手は知っている」

「わかっている。お前については、相手には何も話してない」

祐一にすれば、これから先の事を考えるには、田中という男と信司がどんな話しをしたか知る必要があった。

信司の話では、信司は仕事を辞めた後もアルバイトなどを缺ながら、ぶらぶらとして

いた。そこでちょっとした喧嘩沙汰を起こした。そのとき取り調べをした警察が、草葉署の後藤という警察官であったという。

後藤は取り調べが終わると、ぶらぶらしてないで仕事に就けと咎め、この男に相談すれば良い仕事があると、田中の電話番号を教えたという。

田中に電話をしてみると田中は、警察関係者だと名乗り、警備会社が警察の天下り組織である為に情報がある。俺達が捜査に手心を加えれば、事件はお蔵入り。しかも金は失っても保険で降りるから誰も損はない。すこぶる安全な仕事だと信司に話したという。

勿論、信司が田中の話を信用した裏には、防犯カメラケーブルの切断や通用口を開けておくとの話があり、何処かで手違いや嘘があれば、警備会社に押し入るのを止めて、逃げ帰れば済むとの安易な考えもあった。

「田中とは電話だけで会った事はない。こっちも仲間を誰にするなどの話しはしてない。俺の素性は、後藤から田中に伝わっていても、お前は心配ない」

「……わかった」

わかったといったが、この先、どうするとの考えに結びつくものではなかった。ただ、

そのような返事が口をついた。

「その田中という男に金は渡ったのか？」

「指定された場所に、昨夜のうちに置いた。朝早く、見てきたが無かった」

田中に金が渡っているか、無いかは重要であった。後藤と田中という男の関係がはっきりしないが現職警察官が、田中という男を紹介しているのなら、案外、信司が言ったように警察が絡んでいる可能性も残っている。それがなくとも田中に金が渡っていれば、田中から信司の事が警察に知られる心配も無くなる。

そうなれば信司にして、押し入った警備会社との関わりは全くない。警備会社に身元を特定できるものでも残さない限りは、そんな簡単に捕まるとも思えない。ただ、事は殺人事件、警察も面子にかけて徹底した捜査をしてくる。その点での不安は祐一も拭いきれなかった。

「とにかく信司は、早く逃げた方が良さそうだな、相手に近すぎる」

「わかっている。迷惑を賭けたな。俺はそうする。ただ、これだけは信じてくれ。万一、俺が捕まっても絶対にお前の事は話さない。その変わり金の使い方だけは慎重にしてく

れ」

それは祐一にもわかっていた。地元で、派手な金の使い方をすれば、そこから警察に目をつけられるかも知れない。

「わかった」

「本当に済まない」

信司の言葉に力はなかった。

——簡単に大金を得る。自分の考えの甘さに祐一は、苦痛に満ちた表情をしていた。もし、金を盗んだのが自分達だと知られたら、そのときは間違いなく、警備員殺しの罪も背負わされる。そう思うと心底からの震えを感じた。

祐一はフーと大きな溜め息をついた。仕方ないと思った。今更、後悔しても始まらない。全てでは終わっている。いずれは捕まるのも覚悟しないとならない。しかし、自分が捕まった後の祥子の事を考えると、今は捕まる訳には行かないと思った。

この状態では信司が忠告したように、大金を手にしたからといって、それを使えば目立つ。それは避けないとならないが、祐一は金を必要としていた。

翌日、祐一はサラ金などの金融機関の開く時間を待った。一日かけてサラ金から借りられるだけ金を借りた。取りあえず、それで当面使える金を手にした。今の祐一にとってサラ金の金利は考える必要はなかった。後は、徐々に返済をしながら、また、借りられる所から借りて、返済に充てるという自転車操業を繰り返す。

これで当面は病院の支払いなどに窮する事はない。それに、こうしておけば仮に警察に調べられても、金の線からの追求は避けられる気がした。

夕刻、恐る恐るアパートに戻った。幾ら大丈夫と自分に言いきかせても、本音のところでの怖さはあった。アパートに警察の姿はなかった。祐一は、多少ほっとするものを感じた。

7

草葉署管内で起きた警備会社の異変は、朝、出勤をしてきた従業員によって発見された。現金を奪われたとの連絡を受けた草葉署は、すぐに捜査員を現場に向かわした。

当初は現金略奪として、捜査を始めた警察であったが、資材置き場として使われていた

小部屋から、殺害された警備員が発見されると、警察は強盗殺人事件としての捜査を開始した。

草葉署には、その日の午後には捜査本部が設置され、警視庁からの捜査員も詰めかけていた。

捜査本部では、通用口が開いていた事を重要視した。有力な考えは合鍵を使って忍び込んだとするものであった。警報装置や防犯カメラのケーブルが、外部から切断されていた為に、相当入念な計画のもとに行われたと考えた。そうであれば、人気のない通路に面したドアの合鍵を事前に作成する事も可能とする意見であった。

ピンキングなどによって、鍵を使わずに開ける方法も残されているが、事務所の中に警備員が居ては、この方法には多少無理があると考えられた。

次に、警備員が自ら通用口を開けたとする考えであった。この場合は警備員と犯人は顔見知り、それも親しい間柄でないと、真夜中に鍵をあけたりはしないと考えられた。

捜査本部の最大の疑問は、誰が金庫の番号を話したかになる。死んでいた警備員が脅され話したとする考え方が、最初に浮かぶ。しかし、問題は警備員が死んでいた場所であつ

た。警備員は金庫室から離れた奥まった資材部屋で発見された。

その後の鑑識の結果、小部屋前の廊下に血痕をふき取った跡があった事から刺された場所は、廊下で刺されて小部屋に運ばれたとの見方をしていた。

わざわざ金庫の番号を知る警備員を、金庫から離すのもおかしいものであった。警備員から金庫の番号を聞き出すとすれば、金庫室であろう。番号を告げられても、それで本当に金庫が開くかは、開けてみないと判らない。

そのような考えに立てば、当初から警備員を殺害すると決めていれば、金庫室で刺しても良さそうに思えた。

警備員の遺体の発見を遅らす事によって、犯行の発見を遅らすと犯人が考えたのであれば、当然、金庫の扉や金庫室等も締めて犯人は、出て行く筈が、それらもしないで逃げています。そこからして犯人は、相当急いでいたのが伺える。

金庫には、まだ多くの現金が残されていた。多くの人間が関わっていれば根こそぎ持つていくだろう。犯人は、それもしてない。これらを鑑みて、犯人は少ない数であるとの見方をしていた。

そうなる尚更、警備員の殺されていた場所が不自然に見える。

警備員は大柄ながつちりとした体格をしていた。犯人が連れ回すのには危険に思えた。にも拘わらず犯人がどうして、わざわざ警備員を離れた小部屋前まで連れていく必要があったのか、状況からはなかなか上手く説明ができるものがなかった。

その辺りを含めて推理を行うと警備員は、犯人と出会い頭に刺したとする考えになる。しかし、その場合、犯人は最初から金庫の鍵の番号を警備員から聞かずとも知っていた人物になる。その考えは警備会社の警報装置や、防犯カメラが切断されていた事からも深まる考えであった。

警察は内部事情に詳しい人間が絡んだ犯行としての捜査方針を固めると、草葉警備保障会社の内部の人間や退職者を中心とした捜査を始めた。

犯人に繋がる遺留品は一つだけ残されていた。それは事務所のテーブルに置かれていた真新しいナイフであった。捜査本部では、犯人が置き忘れたものとして重要視をしていた。

捜査を開始してから十日余りが過ぎた。暦も八月に変わっていた。



ここは捜査本部が置かれた草葉署の一室であった。すでに多くの捜査員は現場に向かい部屋には数人の幹部が残っていた。

その部屋で、草葉署署長の西川が、捜査を指揮する警視庁の窪田と話しをしていた。

窪田は中肉中背で、体こそ大きくないが、濃い眉が意志の強さを感じさせるような男である。一方の西川も肩幅の広がちりとした体型であったが、こちらは上背もある。四角張った顔付きに造作の大きな目鼻立ちからは見た目にも貫禄というものが伺えた。

草葉署は、それほど大きな署ではないが、それでも署長が捜査本部に足を運ぶのは珍しい。ただ、西川も少し前までは警視庁に居たので、捜査責任者の窪田とは多少の面識もあった。しかも、警備員が殺害され四億円もの金が強奪される大きな事件の為、それを心配して足を運んだ、そのような感じに見受けられる。

「捜査の状況は捗っていますか？」

西川の言葉に、窪田は苦い表情をした。警備会社の関係者の線で追っていた捜査本部は、当初は、案外早く事件は解決すると見る向きも多かったが、ここに来て様相が変わりだしていた。なかなか、警備会社関係者から、犯人に結びつく人物が現れないでいた。

それだけに、捜査を指揮する窪田にも多少の焦りが、現れていた時期でもあった。そんな窪田の様子を察し、窪田の答えのないままに西川は「そうですか」といつて頷いていた。

「……関係者の線は濃厚なのに、現れない」

少し目を細めた窪田が、そのように西川の頷きに答えた。

「ナイフが残されていたそうですね」

西川の言葉は丁寧であった。所轄で起きた事件とはいえ、事件を仕切っているのは窪田であり、署長の西川は直接事件の捜査にはタッチしていない。その辺の遠慮が丁寧な言葉使いに現れていた。

「ええ、ただ警備員を刺した物ではないです。新品でした。どうしてナイフを残したのか不思議です」

「忘れたのですかね」

「可能性としては、それも有ります」

「ナイフから辿れそうですか？」

「わかりません。大量生産のナイフですから、数多く出回っていて特定はなかなか」

「そうですか、早期の解決、よろしくお願いします」

「ええ、わかりました」

そういうと西川は窪田のそばから離れていった。

それから、しばらく過ぎての事であった。西川署長の元に一通の封筒が送られてきた。

差出人はなかった。封書は少し厚みを帯びていた。

封を切ると、中には白い紙に包まれた小さなものが入っていた。その包みを見ると表面には、事件に関する物と短いメッセージが記されていた。

少し、小首を傾げた西川であったが、慎重に包みを解いてみた。中から出てきたのは、一枚のメモリーカードであった。西川は、それを手に取り少し考えた。

おそらく署長である自分に何らかの事件について訴えをしてきたのだらうと思うと、西川はメモリーカードをパソコンに挿入した。

パソコンから音声が流れてきた。その途端に西川の顔色は見る見る青ざめていった。

祐一は病院から、祥子の状態が急変したとの連絡を受け、急ぎ病院に駆けつけた。祐一が病院に駆けつけたときには、祥子は脳内出血で危篤にあった。暗い病院の廊下で、じつと祐一は、祥子を思っていた。しかし、その祈りは通じなかった。

翌日には、祥子は十四年という短い生涯を終えた。空には雲一つなく、真夏の太陽がじりじりと照りつける暑い日の出来事であった。

祥子を思うと涙が止まらない。何の為に祥子は、この世に生まれてきたのだと祐一は思った。幸せと呼べた時期は、子供のときの僅かな期間であった。

二人の父親である有馬雄蔵が死んだのは、今から七年前、祐一が中学生、祥子が小学三年生のときであった。父親は警察官であった。だからといって特別厳しい父でもなかった。それでも怒るときは怒ったが、普段は優しくかった。

母親は祥子が四歳のときに、近くのショッピングモールで起きた火災に巻き込まれて亡くなっていた。母親の居ない寂しさは有ったが、それを覗けば、父親が亡くなるまでは幸せな三人家族であった。

父親は自殺をしている。それは祐一と祥子が学校に行った後に起きた。祐一は、その日

の事を、今でも鮮明に覚えている。学校から戻ると父親は、蒲団に寝かされていた。動かなくなった父親の遺体に、祥子がすがって泣きじやくっていた。

父親の死、それは、二人の不幸の序章にすぎなかった。父親が亡くなると二人は叔父の家である青沼夫婦に引き取られた。しかし、そこで再び災難が二人を襲った。二人が叔父の家に引き取られ、持ち物の荷を解くまもなく、こんどは叔父の家が火災にあつて、叔父夫婦が焼死した。

火災が起きた時、祐一と祥子は離れで寝ていた為に、一命は取り留めたが、その火災で祥子の背中には大きなケロイドが残った。

火災は放火であつたと、そのときの新聞は伝えていた。叔父叔母を失った二人は、その後、親戚からの引き取り手もなく、児童施設へ入った。

祐一の涙は、いつまでも止まらなかつた。祥子は七歳の春から、辛い出来事しかなかった。それを思うとやるせなかつた。これまで、ずっと二人で生きた。それだけに祐一は、祥子の死を受けいれられずにいた。

祐一は、身近な人だけで祥子を送り出すと、仕事もいかに十日ほどアパートの部屋に

籠もったままで居た。しかし、やがて祐一は、祥子との思いでの詰まった部屋から逃げるように、姿を消していった。

警視庁捜査課の矢野は、青沼公一の家のあった場所にきていた。今は、すでに新たな家が建てられていた。表札も違う名前になっている。

数年前に来たときは、まだ更地で売りに出されていた土地であったのにと思いながら、その真新しい家を見つめた。

矢野は今でも、この場所に立つと、当時の柱だけを残り燃え落ちた焼け跡の記憶が生々しく蘇った。

「あれから八年が過ぎてしまった……」

矢野は悔しそうに口に出した。

火災は放火であった。それも風の強い夜に火を放つという悪質なものであった。その火災で二人の老夫婦が焼死をした。

卑劣な犯行に矢野は、絶対に犯人は許さないと思った。

(また犠牲者がでた。……決着を付けないとならない)

矢野は心の中で静かに呟くと、真新しい家に向かい両手を併せた。

その矢野刑事の遺体が東京湾に浮いているのが発見されたのは、それから二十日余りが過ぎてからであった。矢野刑事の胸には深い傷があった。どうやら鋭利な刃物によって、胸を一突きされ、そのまま東京湾に投げ込まれたようであった。同僚警察官の死に警視庁も、色めき立って捜査を始めた。

## 第二章 奇妙な出会い

1

草葉市から消えた祐一は、曙市に新たな部屋を借りた。ただ、当初は、仕事には就かず惰性で生きていた。子供の頃の明るさ、そんなものは祐一からは消えていた。

金が有れば幸せになれる。それも嘘っぱちであったと気付いた。金なら腐るほどあると

叫びたかった。でも、それで空しさや苛立ちが消える。そんなものでもなかった。

いつになっても祥子の事が頭からは離れない。いったい祥子は何の為に生まれてきた。火事で傷をおい、それでも必死で生きてきた。その挙げ句の果てに、轢き逃げされて死んでしまう。そんな馬鹿な事はあるかと思った。縮れに乱れた感情が祐一から、正常な感覚を奪っていった。

二人を残し死んでいった身勝手な親父、身勝手な事故を起こした運転手、身勝手な放火犯、必死に生きてきた祥子に与えられた結果が、身勝手な人間達の仕打ちであった。

祐一の尖った感情は、いつしか矛先を世間へと向けていた。何かを忘れるように祐一は街をふらつき遊び歩いた。自然、祐一の周りには曰わく付きの人間が集まるようになった。それも祐一とすれば疎まし存在であった。時には殴り合いもした。

全てを失った祐一に、恐れぬ感情は無かった。守る物を持たない人間、いや、命さえどうでも良いと考える人間ほど、厄介な人間は居ない。祐一の目は、いつしか狂犬のような、鋭い眼差しを人に向けていた。

そのころには風貌も、すっかり変わっていた。以前は短めに切り添えていた髪も長く伸



ばし、口元には髭を蓄えている。元々長身であったが、痩せた事で、さらに背は高く見えていた。

酷く荒れた生活を祐一は四年くらい続けた。次第に、その街の悪と呼ばれるような人の間でも、そこそこ名前が知られる存在になっていた。

その頃であった。祐一が佐々木寛一と知り合ったのは。

当時の佐々木は二十前後の若者で、祐一は二十四であった。佐々木も荒れた生活をしてきた。二人が知り合ったのも佐々木が、祐一に喧嘩を吹っつけたのが、始まりであった。ただ、佐々木も祐一と似て、人を頼らない何処か一匹狼的なところがあつた。似たもの同士。それが、佐々木が、祐一のそばから離れなくなった理由なのかも知れない。

佐々木と親しくなると祐一は、二人で金融業を始めていた。金融業といっても闇金であった。深く考えて始めた訳でもない。佐々木が持ち込んできた話に、祐一が乗っただけだ。しかし、金を持っている祐一である。闇金業にのめり込む事もなかった。ほどほどで良かった。取りはぐれるような無理な貸し付けや、強引な取りたては避けていたので闇金を始めても、それほどトラブルを抱えるような事もなく二年が過ぎていた。

闇金をしていると、色々な情報が入ってくる。特に、資金に困っている会社等の情報は事欠かなかった。闇金での儲けは少なかったが、それらの情報のお陰で、会社や土地、建物などの転売で稼げもした。

それらの仕事に力を発揮していたのが、弁のたつ佐々木であった。佐々木は何処でどう覚えたのか判らないが土地取引等多方面に、能力を持っていたので、祐一も重宝していた。

2

祐一は、最近、篠原製作所という会社に目をつけていた。すでに、その会社の社長に数百万を貸していた。

「佐々木、どうだった会社の様子は？」

事務所として借りている机と電話の置かれた、小さな部屋に佐々木が戻ってきた。

「社長、駄目ですね、あの会社は銀行からの融資は、受けられそうにありません」

社長とは祐一の事であった。

「良い物作っているのに、何故、銀行は金を貸さない」

篠原製作所は、技術的に高いものを持っている。特に携帯電話やノートパソコンのバッテリー関連は強い。篠原製作所はJ電気メーカーという大手の下請けであり、これまでは安定した会社経営をしていたが、ここに来て急に資金繰りに困り、祐一のような闇金にまで手を出してきた。

このような会社には、面白みがあると知る祐一である。

「篠原製作所は、自らの技術力を生かして高性能のバッテリーを開発する為に、資金を投入していました。それが裏目となったようです」

「それくらいの事で、銀行が融資を渋るのはおかしいだろう」

「J電気の仕業ですよ」

そう話す佐々木を、祐一が少し不思議そうに見た。

「J電気メーカーが例のバッテリーの技術に気づき、自分のものにしたがいに、裏から銀行に手を回し融資を止めているようです」

佐々木の調べによると金融機関に手を回しているのは、篠原製作所を下請けとして使っている大手のJ電気メーカーのようであった。J電気にも電池部門がある。元々、篠原製

作所がJ電気から請け負っていたのは、数の出ない物や特殊な加工を必要とするバッテリーなどであったが、その技術の高さはJ電気メーカーも認めていた。

それが、ここにきて篠原製作所が、従来の性能を大きく上回る高性能バッテリーの開発に成功しようとしていた。篠原製作所はJ電気の下請けとはいえ、れっきとした独立した企業である。同業他社が必要とするものであれば、幾ら下請けの縁があっても、その高性能バッテリーをJ電気が使おうとすれば、これまでのように仕入れ価格を叩くのも簡単ではなくなる。まして、その高性能バッテリーがJ電気の同業他社にも出回れば、J電気にすれば、おもしろくない結果になる。

それらを危惧したJ電気は、篠原製作所の買収を計画した。しかし、篠原製作所は買収には応じなかったという。何としても篠原製作所を手にしたJ電気は、銀行に圧力を掛け篠原製作所の融資を妨害して資金難に陥れ、篠原製作所を手にするように画策をしていた。

それが、佐々木が調べてきた内容であった。

世の中は所詮、力が全てである。銀行も、それが良い事ではないと知っていても、J電

気メーカーほどの大手の意向とあっては、無視もできないのであろう。

「絡んでいるのがJ電気か……」

「社長、下手すると来月には、あそこは社員の給料も払えなくなるかも知れませんよ」

「篠原の親父さんの考えは？」

「まだ、諦めてはいないようですが、何しろ、俺達のような闇金にまで手を出すのですから、早々に資金はショート。すぐ金を回収した方がいいですよ」

下手に関わらず、今のうちに全額回収した方が良いと佐々木は思った。

良い物を作っても金が無ければ、会社を手放すよりない。金のある会社は、それを買って、また業績を伸ばす。良いか悪いかではなかった。ビジネスの世界も、一皮剥けば金の有り無しで勝負が決まる。

「金、金、金だな……」

「ええ、金の世界です」

「……新型バッテリーは完成しているのか？」

「試作品はできています」

「性能的にはどのくらいのものだ」

「容量的には、現在の四割増しくらいの容量となると聞いています」

四割増しの容量となれば、当面は十分過ぎる商品競争力を持つ。J電気の邪魔さえなければ、篠原製作所は安泰であつたと思うと、力に物を言わせるJ電気のやり方に、祐一は苦々しいものを覚えた。ただ、相手はJ電気という大企業である。

(J電気が、あまり関わりたくない会社だな。さつさと資金を引き揚げ、終わりにするか……)

しかし、気持ちとは裏腹に、

「……佐々木、やはりJ電気のやり方は気に入くない」

「それは俺もJ電気は大嫌いです。しかし、相手は天下のJ電気ですよ。気に入らないも何もないでしょう。俺たちが手向かえるような相手ではないですよ」

「たしかに大きな相手だな……」

「金を回収する。それが無難ですよ」

「そう慌てるな。当面、どのくらいの資金を篠原は必要としている？」

少し驚いたように佐々木は祐一を見た。

「どのくらい必要だ」

再び祐一の声がした。

「四、五千万は必要だと思います」

「それくらいなら何とかなるか……」

「何とかなるって、……社長、追い貸しをするんですか？」

どう考えても、これ以上は危ないと思った佐々木は、眉をひそめながら祐一を見た。

「なあ、佐々木、俺達は溝ネズミだ。ここいらで日の当たる場所にでてみないか？」

犯罪を犯した祐一自身は溝ネズミであろうと、世間から後ろ指を指されようとも構わなかった。しかし、佐々木は結構有能な男である。何処でどう間違っって、このような世界に迷い込んできたのかわからないが、しかし、この男ならチャンスがあれば、まともな仕事に就いても、十分にやっつけていけると祐一は見ていた。

「日の当たる場所にでる。別に悪くはあるまい」

「それはそうですが……」とはいった佐々木であったが、急に、そのような話を話す祐一

に戸惑いながらも、佐々木は怪訝そうな目を向けていた。

「お前も、もういい年だ。いずれ所帯を持つ。その時、子供達に胸を張りたいとは思わないか？　いつまでも、闇金でもあるまい」

「それは、そうかも知れませんが……」

佐々木にしても、いつしか、このような世界に足を踏み入れてはいたが、真つ当な生き方がしたいとの気持ちも、完全に失っていた訳でもなかった。

「佐々木、篠原を立て直してみる気はないか？」

「えっ、俺がですか？」

驚いたように佐々木は、祐一を見た。

「そうだ、新型バッテリーは完成している。やり方は幾らでもある」

「それと闇金をやめると、何か関係があるんですか？　篠原を救うのなら、逆にヤミ金を続けていた方が良いでしょう？」

佐々木は、J電気ほどの大企業に何か揺さぶりをかけるのであれば、このまま闇にいた方が都合良いのではと思った。



「いや、J電気を相手にするには、溝ネズミのまま後ろで、こそこそしても太刀打ちはできない。少なくとも正面からぶち当たらないと駄目だ」

佐々木には祐一が何を考えているのか、さっぱり判らなかつた。しかし、祐一が、そういうのであれば、それでも良いと思つた。いや、相手はJ電気、佐々木としても望むところであつた。

有馬祐一、冷たい心があると思えば、何か人の心に入ってくる不思議な力を持つた人間。闇金をしながら、時には取り立てを止めてしまう事も一度や二度ではなかつた。それは決まつて相手が生活苦で困っている場合であつた。ただ、その反面、ギャンブルや遊びで借りた人間からは、容赦しない取り立てをした。

数年一緒に仕事をしていれば佐々木にも、祐一という男の生き様のようなものを知る事ができた。尤も、それがあから自分も、また、この男のそばに居るのだと思つた。

「お前は口八丁、手八丁の男だ、いい営業マンになれる」

「社長、俺、営業をやるんですか？」

「そうだ、嫌か？」

「嫌じゃありませんが、俺に勤まりますか？」

「心配するな、取りあえず今日は散髪だな」

佐々木も、仕方なさそうに頷いた。

『欠けたピース』試し読みでした。

ここまでのおつきあい、ありがとうございます。